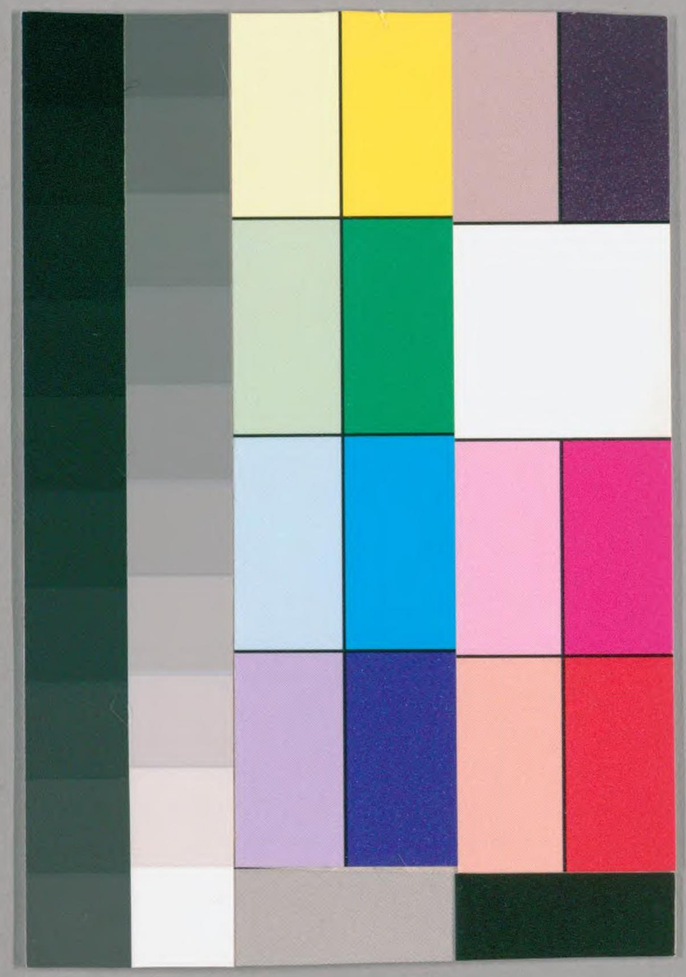


国立国会図書館　　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用

東京都立中央図書館蔵書

今も昔も世は中々人のこゝろまで
あの通り一弾き女子よりうまい
けれど家宝学者の人何ぞも恥ぢ
こゝろさへうきく恨一類もそ
くる迄さどの力恥玉へこゝろ昨日より
今日も貧く
事一時誠こゝろを見え情まし男
翌朝紅閨の中ま新枕をこゝろ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829
ガラス使用

年ごろ後世のうたゝ契れゝ
婿ゝゝも聞きつゝまゝ約束の男お身の上
婚ぬる和事ゝ言ゝうゝ野
ゝゝあごぎれゝゝうゝまゝ
も抜きゝ亜光ゝの女ゝうゝ
夫陵伯春ゝ出ゝる人ぎゝゝ
所ゝ世をのゝ秘ゝもゝのゝゝれぎ
ゝゝゝゝ世ゝまゝゝゝゝ

刈ゝゝゝ多ゝゝゝゝ織人ゝゝやゝ
を彩ゝゝも禮義を厚ゝ男ゝ
ゝゝゝゝ誠をゝゝゝ
この生をゝゝ得ぎ義理ゝ道ふゝ
ゝゝひゝゝゝ出世ゝ思ふ人で
ゝうゝゝや一度栄ゝゝゝ
婚ゝゝゝゝゝゝゝ身ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ人ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ典侍直

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用

婦多川の米八

○おきも
添行よ袈
浮名
書画の花押
雅趣
風流の
あゝ
一の新文

唐琴室内

此米

○傾城は賢女ぞ
此柳橋

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

春色梅兒誉美巻の四

江戸　狂訓亭主人作

第七齣

さても丹次郎八二階より下りかゝる段階子を踏そこなひ梅次と采八にぎやかと後を振向バうとするまに顔よく満さんの眼元を露ふくむお長ごうらこと采八もそこと又ころころ

角田三ころ成やうくおやぢ一冊さん待くおも出と

うのこのに悔そうくからをゴトの

「ヲヤお善さんそこにお久しの袖へさ
おつりぢそしてマア少しの中に替た
モウ何処へ姫にお出でも私とのひがら
ろりとヲヤ丹次郎かね白で「ヲヤ
おまへこゝのう今昔ながら遠くうりさうに
「ナニヲそくうもあるもの袖へおもちやん男とらつてものを
どうもこのこにうるやうで私にうるのんざのう袖れ
さんトすこし丹次郎にあてる「もりやそうぢやまだうん

でも女の意地次第さ「ヲヤ他もの主るうう由
御ぜんすることうるいよ○おもハさんざ姫ぎ
愛相のうわれば袖よおのこと面に出そくや赤ちくく物もい
いぢにありけるが少しく私もうり「米八さん堪忍おーよ
私ハスゝくく遠うの人にのみこと思にうれてりのが
いつまでのうゝツイぢ門くく居とヨトつまの新する一言を娘
ぢにもてこうくく性いの門ぢの世事うるべ「ナニ堪忍も分
もいうまのハまそこてマア廓の方ハどうまあーぢエ「マア今に

うそ〳〵吐そうが者人も角田梅次さんにたゝき酒でも
「ナニマアよの人様へ「よう〳〵あれモウあつ〳〵大様へ「ハアそよ
ウトいふうち「跳へのうるさきと御代下ようをこぶこまようお
む〳〵盃のうきをと〳〵うが〳〵「そ
ぶう〳〵てお出のざへ「イヤモウとんだ事〳〵さとおもふが身の上
と先刻体の事ることとり〳〵そ〳〵
ざ「まだもうひ「そまでやるマアとんだ苦労を引ことへ
物怪の幸と申〳〵鬼も笑どんだ事ら〳〵ら〳〵と後する
又そ降るようへ秋八まとのひるのだ〳〵
ひ「ひお昼を丹次さんと「丹次さんがひうだけ
ふ人ますだうのまへつるく〳〵もるとと男方をとそ〳〵まる
ん「丹次さもも好物の姫うまへ由彩八
出をにもうぞそのうへ義理で二人が
「のとおりふさるも「方八やけふ涙さ
ぎ「と絹真用のうち〳〵てお長に面
ざ「少〳〵お春か「そんうへ〳〵ちのでまこと
「梅次さん

ぞうぞ「アイと取をもる「ちんれいおぼ
め
同じかりくこんかてゑのつもおーつけごま今ごやま
こーも婦多りくぐうやら野やー風雲者の数にあること
しつ
いつも貞操らーのこかてこひごらうダ実のてと梅さん
とてごめとーてこんあがた易くくおこまでごうう押もおさ
まるもののう身のうくそまたつい
で
ゆふーあせおてこーもトしぶりひろて「つい
あてこそくく若旦那と深くのひうへーて身修よう
いつたおよそ今でも一番の
で
おく番でも
ほのりとそうひごぐ
まい
れごうくものてごくこのうぬのまてくこうごうのかぜでうあ
けまごマア若旦那のこそくにうきまごんくくぐまもん
もごうこまごのお今の招
おおてうたごうまそんとうずのごう
おんぐんまい
まうごてもまてこ事ハ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

帰ると造作ながら戸棚なども仕舞
の梅次郎さんの梅次郎さんの梅次郎さんの

り初ぐ〳〵中まるで「おもさう迷ふ
を引うまでものでよ」「いてうぴんとる
なのうさ〳〵ものでてのこで行「いの
うんの浮う〳〵秘へおんかひい〳〵こと
も秘へおめへ不断のまに仏合へか「そ
こに悪智ごてへげへにあへか「そ
らへいやうか丹さんざ〳〵もうんざ
ぶたやうねこもある気へか「そう
ぐ〳〵由断へうへ秘へ「おまるヨト猪呂を来
八へさへ「サアそやへ香で切わげ秘へ
気のお詫で済ず裏に落ていけ秘へ
恐ある人面目もうぜこんあに迷のころ
もの〳〵へ話ぬへ〳〵沢山ざアトまの
色が活業とそのかぐやア秘へぐまま
つぐへ座でも笠底やまるとぞうもこ
ろよ「ア他のて我前方アまへ

おとこ「ハテ此道ざのよふに梅ばかり澤山にうへてあるハ何ぞ拵へるのだ」
ひと「ヲヤ御存しないのだ」
おとこ「ムヽ」
ひと「きのどくな事ハ此ごろ梅の実がばらくとおちるのを拾ひあつめて塩漬にしてうるのだ」
おとこ「ムヽ」
ひと「きが付たらモウ出ようけやう」
おとこ「ヲヽモウ酒もいのト勘定をせねばならぬ」
ひと「ハヽヽヽ」
二人ハ行く
ある家のまへにて
しきりにくしやみをするのを聞て
ひと「ヲヤ」
おとこ「きが付たらモウ勘定をせねばならぬ」
ひと「ハヽヽヽ」
二人ハ行く

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

とんちきな男日でりのまことやうに丹波訛ようの外うるさアアア
私が国訛うけてやらうとおもふ者八一人も無くうまい事
やうすこと二人やはり分ること私ガトいふのこと一あの義理の式
義理のとおりでこゝを一ツ角稽古にやどまりでこゝでも二個の
人一条理がりくりくりく

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

新八「爰ハ子爰ハ何ぢうん 爰「ヲヤこの女アトよるべもなきの
そでさそぐ 「爰さんそこそこうど泣けるもの
おゝおあんまに事成てよけくいこの
きざこそこそ新のうエ ざまで
ものア私も金有斗の
この間でも金のつけざ 爰「ナニうんざ
ねつもかゝ時そまつまてくそこのるの
ドうう 次郎よはみざく岳ア根生中

(モシ)エ
士のこあろく。栄八さきこをそくうんしやく ようう
爰さんよそもかうんこまョ仮ア稼らへ
エ成ろくかまでこのヨ私ハうんとの
いうこの丹さんよ府がはいちやうんしやくこのも近ごろ
ぶーつはざ命も捨る私ごころ今
辻番の宅で金のうけごとこのハ子よくおやこの柱
も栄八さんざ出入城あそこーこのごと義理と実まか
らまるものへはざ門くちまようけるんとあろうとあつ

てサその時八私も仏と申し信女と名ゑ
ゐ残して極楽の新
道へ世帯成持ちまして八とそのお世話つ
きの
店賃も参らんよおこのこ中生れと愛相ぼう
この成ゐくべくそこる笑顔の悪態例よりあの湯呑よ
くも取のぞいてもきり着八おろうとこと成ゐく
着イヤハヤおきゃくのぞいてもきり着八おろうとこと成ゐく
くゐる山家の主文義が年八五十を二ツ二ツうても流石
老こまれ言性も古ぬがらをゆれこ外格子のぞくと
着紫合糸の細帯成着て結び目の高世苗の童
よこやり成袖ぐるま持文着きり今貝着ヨヤちやん
うしろへ八いりまてもも逢ねへの文エイ叶ゐ八ちのと遠く
の達教をまに行まして文まひき町へ医教
が出るがまことに日本一ととの昼教の席が出来ぬく大入サ
着そふまりまんまり遠いのハイおろうそんあひまし
ト猪成出を文アイト着くて下ゐ着八着よ立あがり
着ちやんやるりと着かあるりちのと多賀町まで

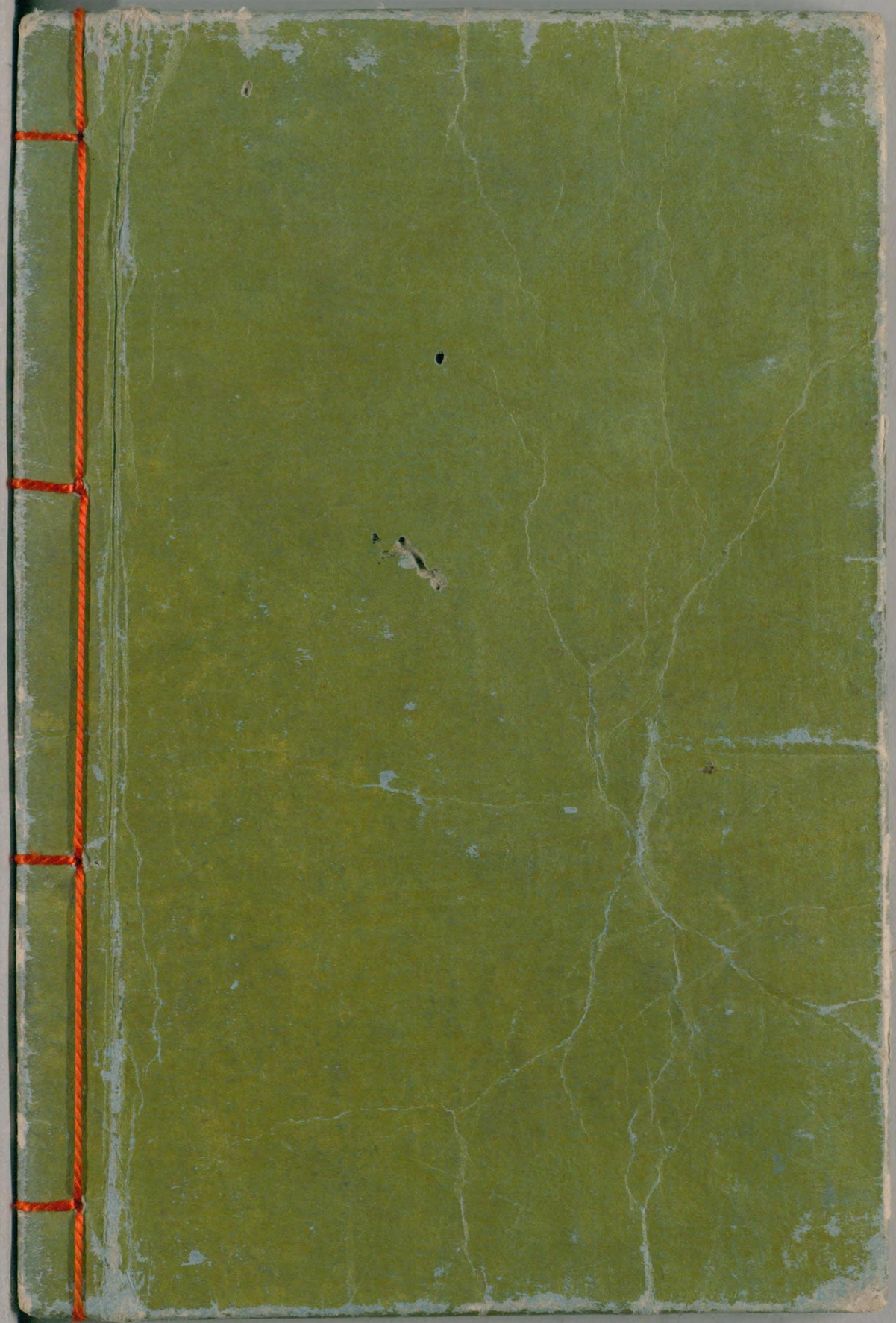
てまるうう　文「ヲヤくそまじやアコリヤマア　ま「ナニ私ゴコロのうつサ　義「コリヤいつそ私くがうんぞとの事ぢやてゐめくの縁をにる義理ハ外の処でもる事と私ハ思ひまよ　ま「ソレでも男の意地もハかそこよ　文「ヲヤ道ハ六ケ方ゴコロのいと緑慶うゐひ事ぢやてもそのうくしの志ハ面よ生まこ分てゴ其方の不運ニうー是ゴうゴモウいろ義理ハ外の事ぢやてゴコマア賜ぐくちやんよめるりとそのうくしく又やもんざ　ま「ソレでも男のゐまこだろり義理ぢと

実ゴ分ても志ハ　ま「マア想像しくくいの通り機嫁を亜ーくもゐりか　文「且那マアのうちへと　義「イエマア帰りて　ま「マアそうでもしかゐ附置よう思ひく辰巳婦志の義ぢよぼうよぼう外ようの殺やろり名ニも同じ二枚図ゴ記金銭きくいやぐくまこうね人とハうまでも里でもうりい事ぢうと書ゴ分てくこりやアぢくくいドリヤ　義「事安うト出ぐく行男の私ハ来ハが楽しそうまでうくよ親兄弟もおよび自己その信切ハ教うねけ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

207
60
2829

春色梅児誉美巻の四終



国立国会図書館　　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用